

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町10
代表取締役社長 川下 晃正
TEL (075) 211-7277
FAX (075) 211-7270
<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

総合社会福祉研究所 会員のみなさまへ

第28回総合社会福祉研究所定期総会のご案内

日時：2018年8月25日(土) 10時15分～

場所：立命館大学大阪いばらきキャンパス C372 講義室

内容：社会福祉をめぐる情勢の特徴と2017年度事業報告／2017年度
決算／第16期(2018年度・19年度)事業計画(案)等。

※その後同会場にて、第24回社会福祉研究交流集を開催します。

※後日、第28回総会および集会のご案内、出欠通知(委任状)を送付しますで、ご返送
をお願いします。

※その他、総会・集に関するお問い合わせは下記まで願います。

総合社会福祉研究所

TEL06-6779-4894 <http://www.sosyaken.jp/>
FAX06-6779-4895 E-mail:mail@sosyaken.jp



子どもを産む権利を奪われた人たちの怒り 旧優生保護法のもとでの強制不妊手術

旧優生保護法のもとで、多くの障害をもった方々が人権を蹂躪^{じゅうりん}され、不妊手術を強制されました。これに対し今、国の謝罪と損害賠償を求めて、障害者の人たちが立ち上がっています。

聴覚言語障害に配慮する特別養護老人ホーム淡路ふくろうの郷（兵庫県洲本市）が、地元の公立高校において毎年講師依頼を受けている人権研修に訪問し、お話をうかがいました。

勝楽^{かつらく}佐代子さん（88歳）は、1929年生まれ。2006年、淡路ふくろうの郷の開所と同時にご夫婦で入居されました。30歳で結婚されましたが、両親の意志によって、亡夫は不妊手術を強制されました。佐代子さんは「子どもは二人ほしかった」と語ります。「子どもの代わり」とご夫婦の思いを込めてつくられた瓶人形（上写真）を見せていただきました。



神戸市在住の高木賢夫さん（79歳）は、1939年に神戸で生まれました。幼少期に中耳炎を患って耳がきこえなくなりました。ろうあ協会を通じて妻・妙子さんと知り合い、結婚しました。しかし、結婚の条件は子どもをつくらないこと、つまり不妊手術でした。

賢夫さんは、母親に連れられ病院でズボン脱がされ手術を受けさせられました。当時は手話通訳の制度もなく、自分の気持ちを伝えることができなかったと話されます。



妻の高木妙子さん（77歳）は、生まれたときから耳がきこえませんでした。賢夫さんと結婚し、子どもをもつことは当然のことと思っていました。「不妊手術は、私たちにまったく相談もなく、親同士が決めたのです。優生保護法が背景となっていることをあとで知りました」と語られました。

ご夫妻は、国に対して謝罪と損害賠償を求めて提訴する予定です。



すすむ

大矢暹さんは、社会福祉法人ひょうご聴覚障害者福祉事業協会の理事長です。

大矢さんは、「一人ひとりの人生に学ぶ」とりくみを進めておられ、入居者の方が直接自らの人生体験を語る援助に力を入れておられます。「老人ホームは、“生きた図書館”です。社会問題の現実を少しでも伝えたい」と機会あるごとに発信されています。(写真・文 西村憲次)

●特集● 「兄ちゃん、おおきに」

【座談会】戦争を語り継ぐ世代がない時代に

戦争の悲惨さをどう伝えるか

板崎貴志／柿本大輔／松原誠／山本隆文 10

平和の願いを後世に語り継ぐこと

松久芳樹 26

●トピックス●

自衛隊に渡さなかった土地・矢臼別に生きる

浦舟三郎さんと二部黎さんを訪ねて

黒田孝彦 28

目が見えないことも“私”と思えるまで

大塚恭子 34

宮古南静園 豊見山一雄さん(89歳)にお会いして

黒田孝彦 42

早川一光さん(94歳)が6月2日 旅立たれました(追悼)

50

第24回社会福祉研究交流集会 案内

52

●連載●

社会福祉研究に人生あり！

恩師・服部英太郎先生と「戦後社会政策論争」

相澤與一 58

相談室の窓から

万引きをしてしまう背景には(その4)

青木道忠 62

育つ風景

カレーのおかわり

清水玲子 64

「助けて！」って言ってもええねんで！

二度と悲劇をくりかえさないために

徳丸ゆき子 66

ひととしてあたりまえに生きたい

聞こえる人に愛されるための教育

清田 廣 68

映画案内

聖の青春

吉村英夫 70

現代の貧困を訪ねて 30年ぶりの引越し その2 生田武志 72

似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

若く描いてね！

ラッキー植松 74

ホームレスから日本を見れば

ありむら潜 76

花咲け！ 男やもめ

川口モトコ 77

●表紙の絵●
神門やす子



みんなのポスト 56／福祉の動き 78／今月の本棚 81／

●グラビア● 子どもを産む権利を奪われた人たちの怒り

旧優生保護法のもとでの強制不妊手術

手話が言語として 尊重されるために

大阪急性期・総合医療センター
手話通訳者

ふじえだ
藤枝

みちこ
道子さん

なぜかはわかりませんが、小さいときから、社会的に弱い人たちが過ごしやすい世の中であってほしい、そのために何かしたい、と漠然と思っていました。いつも眠りにつくときには、「みんながしあわせになりますように」と願いながら寝るような子どもでした。社会には貧困やさまざまな困難を抱え、満たされていない人たちがたくさんいると思うと、私自身もいつもどこか満たされない気持ちでした。

大学へ進学する際には、福祉系か芸術系、どちらかにしようと思っていました。その後、美術の道に進んだものの、福祉にもまだ未練があり、同級生が手話サークルを開くという掲示を大学内で見つけ、「これだ!」と思いました。そこから、地域の手話サークルにも通い、手話を覚えていきました。あとで聞いた話ですが、その同級生は、私が通う短大ではじめて受け入れられた聴覚障害者だったようで、入学する際に、〈大学側は何の配慮も支援もありません〉という誓約書にサインをさせられたそうです。当時はそういったことが平然とおこなわれ、サインをして入学せざるをえなかったのです。

十数年前まで、聴覚支援学校（当時ろう学校）では、手話で話すことは禁止されていました。口の動きを読み取る口話法などをとおして言葉を習得させる、というのが聴覚障害児への教育でした。本誌で連載されている清田廣さんの時代には、きびしい先生は手を動かしている生徒



ふじえだ みちこ

美術短期大学で同級生の聴覚障害者が主催する手話サークルに入り、手話とであう。卒業後は、学童保育指導員、共同作業所指導員を経て、現在は大阪急性期・総合医療センター手話通訳者（非常勤）として勤務。

を見つけると、身体のうちろで手を縛ったそうです。親も学校の教え方を受けて、家でも手話を使うことを禁じ、そのため子どもどうしは大人のいないところで隠れて手話でおしゃべりをしたと聞いています。つまり、手話には社会の中から阻害されてきた歴史があり、手話は言語として認められてこなかったのです。

大阪府が手話を言語として認めたのは、二〇一七年になってからです（二〇一七年三月、手話言語条例が施行）。条例では、聴覚障害児が乳幼児期から家族とともに手話を習得できる機会が必要であり、教育の場でも手話を習得する機会が必要だ、ということなどが盛り込まれました。

他方で、国は〈手話言語法〉を制定していません。今後、手話言語法が制定され、手話が言語として尊重されるよう、国が積極的にとりくむようになってほしいです。東日本大震災の年から、やっと首相官邸の記者会見等に、手話通訳がつくようになりました。公的な発表のみならず、だれもが手話をとおして、いつでもどこでも誰とでもコミュニケーションがとれるような社会になってほしいと思いますながら、日々活動しています。

特集 「兄ちゃん、おおきに」 神戸空襲と高畑勲に思いを馳せて

野坂昭如^{あきゆき}氏の短編小説を高畑勲監督がアニメーションに仕立て上げた『火垂るの墓』が上映されたのは、一九八八年。同年、宮崎駿監督の『となりのトトロ』も上映された。この年の五月に、総合社会福祉研究所が産声をあげる。

『火垂るの墓』のはじまり部分。兵庫県神戸市の三宮駅で餓死した清太。彼の所持品はドロップ缶に入った少量の灰と骨のかけら。それを見つけた清掃員は近くの野原に投げ捨てた。天に向かった清太の魂は、四歳で亡くなった妹・節子の魂と再会する。映画はそこから始まる。

清太と節子の兄妹二人を、螢の群れが囲む。「昭和二〇年九月二一日夜、ぼくは死んだ」とナレーションが入る。映画は、第二次世界大戦末期の日本で必死に生き延びようとする、孤児の兄妹の物語。しかし、高畑監督は、上映当時の若者たちと、清太・節子の姿をダブらせた。その高畑勲さんが、四月五日に旅立った。清太と節子に会っているのかもしれない。会って、どのような話をしているのだろうか？ 節子が残した最後の「兄ちゃん、おおきに」の思いはなんだったのか。

一九四五年八月六日、広島に原爆が投下された。同じ日に、兵庫県の御影町・魚崎町・住吉村・本山村・本庄村もとやまほんじょう（現神戸市東灘区）から、芦屋市を経て西宮市・鳴尾村（現西宮市）にいたる地域、いわゆる阪神地域が、一つの市街地目標として爆撃された。中小都市市街地への焼夷弾攻撃の一つに位置づけられる。空襲は、マリアナ基地から飛んできたB29、二五〇機によるものだった。

八月六日までの神戸への五回の空襲（神戸大空襲）で、八〇四三・四四トンの焼夷弾、破砕弾、爆弾が投下された。焼夷弾は、攻撃対象を焼き払うために使用。破砕弾は、爆発によって多量の鉄片が飛散し、人員を殺傷、機材を破壊する。爆弾は容器に爆薬を装填して信管を取り付けた兵器であり、爆風、破片、火災による被害が目的だった。

高畑監督は、「戦争末期の負け戦の果てに、自分たちが受けた悲惨な体験を語っても、これから突入していくかもしれない戦争を防止することにはならないだろう、と私は思います。やはり、もっと学ばなければならないのは、そうなる前のこと、どうして戦争を始めてしまったのか、であり、どうしたら始めないで済むのか、そしていったん始まってしまったあと、為政者は、国民は、いったいどう振る舞ったのか、なのではないでしょうか」と語っています。（高畑勲著『君が戦争を欲しないならば』二〇一五年、岩波ブックレット、p7）

（編集主幹）